

一

次の各問に答えなさい。

問一

次の――部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。

- 1 キンガクを計算する。
- 2 オウフクの乗車券。
- 3 幼い妹をヤシナう。
- 4 呼吸でサンソを取り入れる。
- 5 貿易会社にツトめる。
- 6 発言するために手をアげる。
- 7 長い歳月をツイやす。
- 8 作業はジュンチョウに進んでいる。
- 9 事業でセイコウを収める。
- 10 昆虫ハカセと呼ばれる。
- 11 憲法の三大理念を学ぶ。
- 12 熟れた実を食べる。
- 13 新しい展望が開ける。
- 14 明るく朗らかに笑う。
- 15 大勢の部下に従える。

問二

次の四字熟語の空欄に入る漢字を書きなさい。

- 1 自□自在 ……思い通りにできる様子。
- 2 千差万□ ……それぞれに違っていること。
- 3 □刀直入 ……いきなり本論に入ること。
- 4 □我夢中 ……熱中してわれを忘れること。
- 5 一□二鳥 ……一つのことと二つの利益を得ること。

二 次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

大物を捕るためにはもう一つの方法しかない。それは木の幹を蹴飛ばすことだ。幹を蹴ると、虫がしびれて、ぼとっと落ちてくるのだ。クヌギかどうかわからないが（僕たちは目で木の種類をかなり正確に見分けていたけれど、名前は一つ知らなかった）、クワやカブトが捕れる木はたった一種類しかない。幹が地割れのようにいくつも大きくひび割れた木だ。

そのひび割れ木の中でも、小さい木にはいない。大きい木のほうがいい。子どもが抱きしめて手がやっと届くくらいの太さの木で、周りの木とあまりくっついていないもの。木の根元に笹や雑草が生えていないもの。そういう木が森や林にはときどきある。そういう木は独特の存在感があるので、よくわかる。

目的は森の最深部にある、まるでご神体のような「※ノコの木」一つだが、せっかくなので、手近に見える木も蹴っていくことにした。一番乗り確実なので、その辺は余裕だ。

僕はちよっと細めの木を横蹴りに蹴った。木は大きく揺れた。耳を澄ます、ポタポタポタッという音はいずれも軽く、あきらかに朝露だった。

さすがにこれは細すぎたか。次にもっと太い木を蹴ってみる。でも、僕は力がない。幹はびくともしない。虫じゃなくてこっちの足の裏がしびれただけだ。

「阪野、そんなよわっちい蹴り方じゃダメだぜ」マサトがへらへらと笑う。ほんとにこいつは気にさわるやつだ。（ア）

「じゃ、おまえ、やってみろよ」悔し紛れに僕はもっと太い木を指差した。いかにも「いそうな木」だが、子どもの手には負えそうにないやつだ。

「おう」マサトは答えると、「おりゃ！」と無造作に右足で前に蹴飛ばした。

驚いた。僕の周りではカッチャンしかそんな蹴り方をできる人はいない。ちよっと小学四年とは思えないパワーだ。朝露に混じってほんの少し大きいポタッという音がした。僕たちは走った。やっぱりまだ暗いので、もう一度電灯をつけ、しばらく地面の笹や雑草をかきわけていくと、コクワガタのメスが裏返しになって足をバタバタさせていた。

「お、見つけ！」

「え、なにに？ ノコ？」マサトが興奮した声で訊く。（イ）

「いや、コクワのメス」

「なーんだ」ホッとしたようにマサトが言う。コクワガタのメスはいちばんランクが低い。かるうじてカミキリより上で、水槽にノコヤカブトがいて、その引き立て役として、まあ、いらないよりいたほうがいいという程度だ。

コクワガタを用意してきたビニール袋に突っ込みながら、「マサトはバカにできない」と僕は気を引き締めた。動きは早くないがなんせバカ力だ。それに本気でノコを捕ろうと思っている。虫捕りは本気の奴が絶対に勝つ。クワ捕りの仲間、仲間であると同時にライバルだ。誰が蹴っ

ても関係ない。見つけた者勝ちなのだ。

僕たちはときどき木を蹴りながら進み、マサトはコクワガタのオスのけっこう大きなやつを捕まえた。こっちは野球のボールを拾っているが、クワガタ捕りとしてはこの時点でマサトの一步リードは否めない。その証拠に奴は機嫌よさそうだ。

ときどき、「うおおお！」という変な雄叫びをあげて一メートルくらいの枝を拾って思い切り遠くへ投げる。びゅん！とすごい音がして向こうにある大きな木の枝にぶつかり、割れて落ちた。

「うおっ、すげえ……」

「うははは！」とマサトは大声で笑った。僕はビクッとした。怪物じみている。ヒバゴンという雪男みたいな怪物が広島県の山奥にいますと本で読んだことがあるけど、マサトはヒバゴンの子どもなんじゃないか。（ウ）

変な奴と来てしまったものだが、しかしノコ捕りには負けるわけにはいかない。

「あ、あれだ！」

朝露ですでに靴も靴下もびしょぬれになって、僕たちはいちばん奥のノコの木にたどりついた。朝の光の中に一本のまっすぐな木が輝いていた。

大きな木だ。いや、太さはそんなでもないが、すくと立ち、すぐ上まで、他の木よりも高いところまで行ってから枝葉を伸ばしている。まわりに下草はなく、他の木もまるで遠慮するかのよう、少し離れて生えている。

さあ、いよいよ本番だ。勝負は一回きりである。クワでもカブトでも、一回木を蹴って落ちてこないときは、二回目にもっと強く蹴っても絶対に落ちてこない。不意打ちが重要なのだ。僕もそうだが、他の子たちもときどきしくじってちゃんと蹴りそこなうと、もうそれでアウトだ。だから、勝負は一回こっきりなのだ。（エ）

さあ、どっちが蹴るか。ノコがいる木を蹴るのはそれだけでワクワクする。それに僕の経験だと自分で蹴ったときのほうが、人が蹴ったときより捕れることが多い気がする。

「マサト、じゃんけんだ」

「よし」

じゃんけん、チッケッタ！

「勝った！」マサトがガッツポーズをとった。

マサトは今までに見たことがないくらい真剣な顔になり、一歩後ろに下がると、すごい勢いで右足をあげてひび割れた幹を蹴った。

どーんという音が響き、僕たちは中腰で耳を澄ませた。大量の朝露が落ちるバラバラッという音の中に、一つだけポタッという重い音がした。

「あれだ！」心の中で叫んで僕はその音の真ん中へ突っ込んでいった。マサトも同時に突っ込む。幹から三分くらいのところで、雑草が生えているし、その雑草も落下した露を受けていっせいに揺れている。腰をかがめて、青い匂いがキーンとする草をかきわけると、ノコがバタバタとも

がいていた。

うお、でかい！素早くひつつかんで持ち上げた。ぐわんと大きく湾曲しギザギザした角、赤みがかった茶色がつやつやと光っている体。やった。朝三時起きで来た甲斐があった。一年に一度の大物だ。

「見っけ！」

え、ほんと？ と走りよるマサトに、得意げにノコを見せ付けた。

「あ、すげえ……。でけえ……」マサトは呆然としたように目を近づけて見つめた。

ほら、どうだ。オレの勝ちだ。

次の瞬間、マサトはニコッと笑った。

「阪野、やったな！ すげえぞ、これ。よかったな！」

ほんとうに嬉しそうに顔をしていた。

——マサトっていい奴なんだな……。

僕は二重に嬉しくなってノコとマサトを見比べた。

※1クワ……クワガタムシのこと

※2カブト……カブトムシのこと

※3ノコ……ノコギリクワガタのこと

(高野秀行『またやぶけの夕焼け』による)

問一 本文には、次の一文が抜けている。この一文が入るのにもっとも適切な箇所を(ア)～(エ)より選び、記号で答えなさい。

のんびりしているようでも、マサトもノコには真剣なのがわかる。

問二 部a「気にさわる」、b「呆然としたように」の意味についてももっとも適当なものを

選び、記号で答えなさい。

a「気にさわる」

- 1 おもしろい
- 2 話しかけづらい
- 3 心の優しい
- 4 イライラさせる

b「呆然としたように」

- 1 あっけにとられたように
- 2 目を輝かせた様子で
- 3 絶望したように
- 4 怒ったように

問三 ——部1「大物を捕るためにはもう一つの方法しかない」とあるが、「もう一つの方法」とはどのような方法か。空欄に当てはまる言葉を指定された字数に合うように本文中から抜き出なさい。

子どもが抱きしめてやっと手が届くくらい大きさで、幹が【イ(三字)】のようにいくつも大きくひび割れていて、周りの木と【ロ(十一字)】もので、木の根元に【ハ(四字)】が生えていない木を蹴る方法。

問四 ——部2「いそうな木」とあるが、なにが「いそう」なのか。記号で答えなさい。

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 カブト      | 2 コクワガタのオス |
| 3 コクワガタのメス | 4 ノコ       |

問五 ——部3「ホッとしたように」とあるが、マサトはなぜ「ホッとした」のか。もっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

- 1 コクワガタのメスはノコとちがって危険な昆虫ではないから。
- 2 マサトが探していたのはコクワガタのメスではなくオスだったから。
- 3 「僕」がノコを見つけたのではないことがわかったから。
- 4 コクワガタのメスはマサトではなく「僕」が探していたものだったから。

問六 ——部4「真剣な顔」とあるが、マサトがそのような顔をしたのはなぜか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問七 ——部5「二重に嬉しくなって」とあるが、「僕」が嬉しくなった理由を二つ書きなさい。

三 次の文章を読み、あとの各問に答えなさい。

これまで考えられてきた勉強というものは、大体において「知識」、ないし情報を取り込むことであった。小学校からひたすらに知識を頭に入れ、試験の時にはその知識を使って答案を書いて、点をとるのである。この知識というものは、大変有用であると考えられている。したがって知識をたくさん持つことは、その人間の価値を高めると思われるのである。しかし、満点の答案を書くこととしている人たちが持っているような知識がたくさんあっても、それは本当の人間の力ではない。

問題は、それが本当に人間として大事な能力であるのかどうかだ。ただ知識ばかり集めて喜んでいると、だんだん馬鹿になる。**イ**、学校でこんなことを考えたら授業を行うことができなくなってしまう。それで、そういうことは言わないことになっている。

小学校からだんだん知識が増えていき、それと引き換えにどんどん頭がはたらかなくなってしまう。ここで言う「頭が悪い」というのは、「新しいことが考えられない」「判断をする力がない」ということ。

知識が増えると、どうしてもその知識をそのまま使用して物事を処理しようとしがちになる。自分自身で考えることが、ついついおっくうになりがちだ。本に書いてあることをそのまま頭の中に入れ、それによっていれば自分で考える必要はなくなる。

知識をありがたがるのは歴史的なもので、どうにもならないこともある。ヨーロッパでは十六世紀の終わり頃には、知識というものは社会的価値を持っているという考え方が確立した。以来、教育機関はとにかく知識を身につけることを教えた。それが大体今も続いている。

詰め込んでいけば、頭の中はいずれ知識でいっぱいになるが、それは良いこと、素晴らしいことだとみなされる。だが本当にそうだろうか？自分の頭の中が、他人が考えた知識、本に書いてある知識で満杯になることが、そんなにいいことだろうか？トンデモないことでおしる逆だ。そんな知識だけの頭では身動きがとれなくなってしまう。いわば、知識メタボリック症候群。知識のぜい肉で太ってしまうと、軽やかで柔軟な思考など到底望めなくなる。

物知りはだいたいにおいてものを考えない傾向がつよい。古くからこれを「物知りの馬鹿」と言った。他にも、「なんでも知っている馬鹿」とか「学問のある馬鹿」などもこれにあたる。つまり、知識はあるけど、自分でもものを考える力、新しい事を考え出す力がない人のことである。これは人間としてはあまり高級ではない。そういうことは昔からすでにわかっていた。しかし一方では、常に満点の答案を書けるような、正確な記憶をもっているものは人間以外に存在しなかった。そこで記憶力の優れた人間が、尊重されてきたのである。

**ロ**、今からおおよそ六〇年前に、二〇世紀中ごろ、かのコンピューターというものが登場した。これは人類にとって大事件だった。いくら優秀な人間でも知識を詰め込むには限界がある。それに対して、コンピューターの記憶は正確無比だ。記憶、知識に関しては人間はコンピューターに勝てるわけがない。実際、さまざまな場面において人間はコンピューターに負け、仕事を奪われてきた。

人間がコンピューターに勝つためにはどうしたらよいか。

その方法は「考える」こと。コンピューターは「記憶する」ことにかけては敵なしたが、「考える」ことを知らない。よく、プロの棋士と碁を打ってコンピューターが勝ったなんていうニュースを耳にする。コンピューターが考えているわけではない。知識として大量のデータを記憶しているのである。本当の意味で「考える」ということは、日本人だけでなく、現代を生きる人間に

とっても極めて難しい。**ハ**、われわれは「知識」をもっているからだ。知識がある程度まで増えると、自分の頭で考えるまでもなくなる。知識を利用して、問題を処理できるようになる。借り物の知識でなんとか問題を解決してしまう。もちろん知識は必要である。何も知らなければただの無為で終わってしまう。ただ、知識は多ければ多いほどいいと喜ぶのがいけない。良い知識を適量、しっかり頭の中に入れて、それを基にしながら自分の頭でひとが考えないことを考える力をつける。

ところが、である。ふりまわされたいためには、よけいな知識はほどよく忘れなければならぬ。しかし、この「忘れる」ことが意外に難しい。

そもそも未知なものに対しては、借り物の知識などでは役に立たないのが当たり前だ。それまでの知識から外れた、わけのわからないモノゴトを処理、解決するには、ありきたりの知識では役に立たない。いったん捨てて、新しい考えをしぼり出す力が必要となる。そういう思考力を身につけられれば、コンピューターがどんなに発達しようと、人間が存在価値を見失うことはないだろう。

人間が自分の頭で考えるようになるには何が必要か。

**二** 体を動かすということ。そしてもうひとつには、不幸とか、貧困とか、失敗とか、そういう辛い境遇から逃げないことだ。

困難な状況の中にいないと、頭は必死になって考える事をしない。美味しいものをたべ、快適な生活をして、いい学校に通って、いい成績をあげているうちは、ものを考えるチャンスが少ない。例えば、家が貧しくて、どうもこのままでは大学に行けないかもしれないという状況に直面したとする。そこで本当に力がある人は、どうすればいいかということの本気で考える。金持ちのお坊ちゃんやヘラヘラしている間に、ものすごい苦勞をして人間力もつける。

苦勞や失敗が少ないというのは幸せなことではある。しかし、幸せは、人間を育てるのにプラスにはたらくことはすくない。**A** がやってきたときにこそ、人間は自分の中にねまっている力が目を覚まし、大きなことをするようになる。

一般の若い人たちはそうした悪い境遇に置かれていないが、それをよるこぶのは賢明ではない。トーマス・カーライルというイギリスの思想家がこんな面白いことを言っている。「経験は最良の教師である。ただし授業料が高い！」——ここで言う経験とは当然、辛い経験、痛い経験、苦しい経験のこと。苦しい経験こそが、われわれをたくましく育ててくれる最良の先生なのである。

若い人の人生はこれから始まる。この先、どこで待ち受けているかわからない荒々しい困難に負けないで、むしろ困難をチャンスととらえることで、新しい人間力を身につけ、素晴らしい人生を切り開いてほしい。そう考えることのできる人を、未来は待っている。

問一 イ 二 にあてはまる語句として、最も適切なものをそれぞれ次の中から選  
び、記号で答えなさい。

- |   |      |   |      |   |      |
|---|------|---|------|---|------|
| 1 | もともと | 2 | つまり  | 3 | まず   |
| 4 | ところが | 5 | なおかつ | 6 | なぜなら |

問二 — 部1「それ」とは何ですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問三 — 部2「知識はあるけど、自分でものを考える力、新しい事を考え出す力がない人」と  
ありますが、それを言い換えた部分を、これより前の段落から十一字で探し、抜き出しな  
さい。

問四 — 部3「人間がコンピューターに勝つためにはどうしたらよいか」とありますが、筆者  
はどうしたらよいと考えていますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- |   |                        |
|---|------------------------|
| 1 | コンピューターよりもたくさんのことを忘れる。 |
| 2 | 知識をすてて、思考力だけを鍛えていく。    |
| 3 | 知識にばかり頼らない姿勢も持つておく。    |
| 4 | 新たに、万能的知識を発見しようとする。    |

問五 — 部「本当の人間の力」とありますが、それはどのような力ですか、十字程度で答  
えなさい。

問六 A にいれるのに適切な言葉を本文中から六字以内で考え、書き抜きなさい。

問七 本文の内容に一致するものとして、適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- |   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| 1 | 十六世紀ごろから、知識は万能ではないということが考えられていた。     |
| 2 | コンピューターの開発は、人間の真の価値を見出すことにつながったといえる。 |
| 3 | 現代の詰め込み式の学校教育では、思考力を鍛える事は絶対になわなない。   |
| 4 | トーマス・カーライルは、人間を育てるのに、幸せはマイナスになると考えた。 |
| 5 | これからの時代に望まれるのは、困難から逃げない人間である。        |

|      |   |
|------|---|
| 受験番号 |   |
| 氏    | 名 |
|      |   |

  

|    |
|----|
| 得点 |
|    |

|   |   |   |
|---|---|---|
| 問 | 1 |   |
| 2 |   |   |
| 3 |   | う |

|   |    |
|---|----|
| 4 |    |
| 5 | める |
| 6 | げる |

|   |    |
|---|----|
| 7 | やす |
| 8 |    |
| 9 |    |

|    |    |
|----|----|
| 10 |    |
| 11 |    |
| 12 | れた |

|    |    |
|----|----|
| 13 |    |
| 14 | らか |
| 15 | える |

|    |   |  |
|----|---|--|
| 問二 | 1 |  |
|    | 2 |  |
|    | 3 |  |
|    | 4 |  |
|    | 5 |  |

|                                                                                           |                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; margin: 0 auto;"></div> | <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; margin: 0 auto;"></div> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|

問

問

a

b

問三

[illegible]

|   |
|---|
| 八 |
|   |
|   |
|   |

問五

三

問六

| 問七 |  |
|----|--|
|    |  |

|   |  |
|---|--|
| イ |  |
| ロ |  |
| ハ |  |
| ニ |  |

問二

問三

問四

問五

問六

|    |  |
|----|--|
| 問七 |  |
|----|--|